

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第553号 平成25年6月3日

母子心中？

5月24日、大阪府北区のマンションの1室で、母子の遺体が発見されました。警察によると、部屋には冷蔵庫がなく、食塩が僅かにあっただけで、女性の胃の中には内容物はなかったといいます。

死亡解剖の結果、2人の死亡時期は今年の2月頃で、免許証などからこの部屋に住む井上充代さん(28歳)と息子の瑠海ちゃん(3歳)と見られるとのこと。

また、マンションの部屋からは「もっとおいしい食事させてあげたかった」との趣旨のメモが見つかっており、大阪府警では、女性が病死した後に幼児が餓死したか、女性が無理心中を図った可能性もあるとみて、2人の死亡の経緯を調べています(以上、5月28日付北海道新聞他)。

経済的に豊かな筈の日本で、電気もガスも止められ、食べる物もないまま餓死してしまうという事件が後を絶たないのは何故なのでしょう。こうした悲惨な事件が繰り返され、しかも、幼い子どもまで巻き添えになっている事に怒りを覚えます。

孤独死という事件が起こる度に感じる事は、何故もっと早く発見できないのだろうかという事です。電気もガスも止められた状態のまま、何故何か月も放置されたままになっているのでしょうか。もっと早く発見して上げる手立てはないものか、いつも疑問に感じます。

今回の事件は、夫によるDVが絡んでいる可能性が高いようです。昨年10月頃までは守口市で夫と3人で暮らしていたものの、夫からの暴力から逃れる為に、知人にも行き先を知らせず密かに転居した様です。

またも夫のDVかと暗澹たる気持ちですが、それでも、餓死という最悪の事態を避ける事は可能だったのではないかと思います。

亡くなった女性は昨年7月、当時住んでいた守口市の生活保護担当窓口を訪れ、「生活の援助を受けているが、援助が切れたら不安だ」と相談していたそうです。市職員は、「見通しが立たない場合は連絡してほしい」と伝えていましたが、その後は連絡がつかない状態になっていました。

また、亡くなった女性の母親は昨年10月、府警察の守口署に「娘が満足な生活ができていないかもしれない」と相談しており、その際、母親と署員が井上さんと

会って広島の実家に帰るよう勧めたそうですが、井上さんは拒否したといえます。そして、その直後、家族に無断で瑠海ちゃんと大阪市へ転居しています。

今日では、夫のDVから逃れる為なら、一時避難の為のシェルターはじめ様々な手段があります。警察に駆け込んで良いし、市役所に相談する等方法は幾らでもあった筈です。何より、母親と警察が訪ねてきた際、助けを求めれば最悪の事態だけは避けられたでしょう。

亡くなった女性が、母親として「息子の命を守らなければ」という強い意志があったなら、何をさておいても生きる算段をした筈だと思います。そうしなかったのは、「セルフネグレクト」の状況に陥っていたせいではないかと思っています。

亡くなった方に対して向ける言葉ではないと承知していますが、しかし、仮に精神的に追い詰められていたとしても、数ある選択肢の中で、我が身を捨てるという最悪の選択をしてしまった事だけは確かだと、あえて申し上げたいと思います。本人は半ば覚悟の上だったかも知れませんが、しかし、その選択に頑是なき幼子を巻き込む権利は、母親といえども有りません。

「セルフネグレクト」は、大人が通常的生活を維持する為に必要な行為を行う意欲や能力をなくした状態をいいます。必要な食事を摂らなかつたり医療を拒否したりし、最悪の場合は餓死に至る場合があるといわれていますが、今、全国各地でこうした「セルフネグレクト」に関わる問題が多発しています。

「セルフネグレクト」は、個人の気持ちに立ち入る事にもなり、これを防止し、解決する事は容易ではありませんが、まずは、周りにいる人々が、皆で見守り、おせっかいを焼く事だと思います。そしてその為にも、人と人の絆を太くし、地域のコミュニティを再構築して行く必要がある事を痛感しています。(塾頭:吉田 洋一)